

岡崎城跡菅生川端石垣発掘調査 現地説明会（H29.1.29）

岡崎市教育委員会

【発掘調査】：平成28年12月7日～平成29年2月28日（予定）

【調査経緯】：平成27年12月に乙川リバーフロント地区整備事業に伴い、岡崎城跡菅生川端石垣の試掘調査を実施し、菅生川端石垣が現在も良好に残存することを初めて確認した。より詳細な石垣データを収集するために平成28年12月から発掘調査を実施している。

【菅生川端石垣概要】

- ・菅生川端石垣は岡崎藩3代藩主・本多忠利により、寛永年間（1624～43）に築造が始まり、正保元年（1644）に完成した（『竜城中岡崎中分間記』『岡崎竜城古伝分間記』の記録による）。
- ・岡崎城郭の石垣のうち、文献資料により築造年代が確認できる数少ない石垣として貴重。
- ・菅生川端石垣は全長約400mで、切れ目のない直線的な石垣城壁としては日本最長級。
- ・一連の石垣に3箇所もの四角い突出部「横矢枡形」が存在するのは日本でも岡崎城のみ。
- ・横矢枡形は敵の侵入に二方向からの矢（鉄砲）が掛けられる構造で、城外郭南辺の防御性を高めるとともに、菅生川を往来する舟から見る岡崎城の視覚的効果を高めている。
- ・徳川家臣団である本多氏が横矢枡形を多用した城造りであり、徳川家康の築城思考がみてとれる。
- ・籠崎堤と合わせ、菅生川に対する治水（堤防）の役割を果たしていた。
- ・石垣は1石ずつ表面に「すだれ仕上げ」とよばれる「はつり」による化粧が加えられた丁寧な仕上げ。
- ・試掘調査により石垣の総高が5.0mに及ぶことが判明（地上部2.0m、地下部3.0m）。



図1 岡崎城絵図における菅生川端石垣

次回現地説明会：平成29年2月19日（日） 11:00～ 14:00～

【発掘調査の状況】

【No. 地点】

石垣の西端付近に位置する。絵図では白山曲輪の西側の堀がここで菅生川と合流する地点にあたる。絵図によれば、菅生川端石垣がこの地点で北に折れて白山曲輪西側の堀石垣へ連続していく場合と、菅生川端石垣がここで終わり、土橋「辰之口」以降は総構の土塁へとつながっていく場合がある。

石垣の「折れ」ないし土塁との境目を検出する目的で調査区を設定した。調査では石垣を検出したが、石垣天端石はなく上部は削平ないし崩落したものである。調査区内で石垣の「折れ」や土塁の境目は確認できず、この地点よりさらに西側にあるものと考えられる。



写真1 No. 石垣（西端付近）

菅生川端石垣の西端部付近の絵図



図2 水野家時代の絵図



図3 後本多家時代の絵図

水野家時代（1645～1762年）の絵図には、菅生川端石垣がこの地点で北に折れて白山曲輪西側の堀石垣へ連続していくものと、菅生川端石垣がここで終わり、土橋「辰之口」以降は総構の土塁へとつながっていく場合がある。後本多家時代（1769～1868年）の絵図はいずれも の表現であることから、辰之口は水野家時代のいずれかの時期に造られたものか。

【No. 地点】

調査地点は樹木（桜）が近接しており、樹木の根が石垣に影響を与えていないか確認するために調査区を設定した。調査では石垣を2.5mまで確認した（地上部と合わせて高さ3.8m）が、石垣の最下端には至らなかった。掘削した最深部で立沢瀧文軒丸瓦が出土した。石垣は孕みは少ないものの、石垣上部法面にある樹木の根が石垣背後から生えてきており、石垣の石材間を埋める「間詰め石」を崩す要因の一つになっているものと考えられる。



写真3 No. 石垣

【No. 地点】

菅生川端石垣の中間地点での石垣下層部の確認のために調査区を設定した。調査では石垣を 2.5mまで確認した(地上部と合わせて高さ 4.5m)が、石垣の最下端には至らなかった。検出した石垣には刻印が見られる。刻印は「□」「ㄧ」「㊦」の3種類で、と は1つの石に刻まれている。



写真4 刻印「□」「ㄧ」



写真5 刻印「㊦」

岡崎城の石垣刻印はこれまであまり多くは確認されていなかった。今回の調査では8種類の刻印が新たに確認された。刻印の意味については大名・家臣・石工集団を示す記号、石材採石段階での記号など諸説ある。岡崎城における刻印の意味については今後の課題。



写真6 No. 石垣

【No. 地点】

石垣の東端付近に位置する。絵図では菅生門南の石垣にあたる(図4)。調査地点は菅生川端石垣が北に折れ、再び東へ折れて菅生門南の石垣となる隅部にあたる。すでに露出している石垣隅部を起点に北側への折れの程度を確認するため調査区を設定した。調査では北へ折れた石垣が約 1.7m残存していたが、それ以降は石垣が続かず、裏込め石が崩れている状況を確認した。慶応2年(1866)12月の城郭修復伺絵図『参河國岡崎城破損所覚』に「菅生門堀下石垣崩」とあり「此所石垣 高一間二尺(2.42m) 幅二間半(4.54m)崩」の記述と一致する。この修理伺いに対する老中奉書は確認されておらず、修復されたかは不明。

菅生川端石垣の東端部付近の絵図

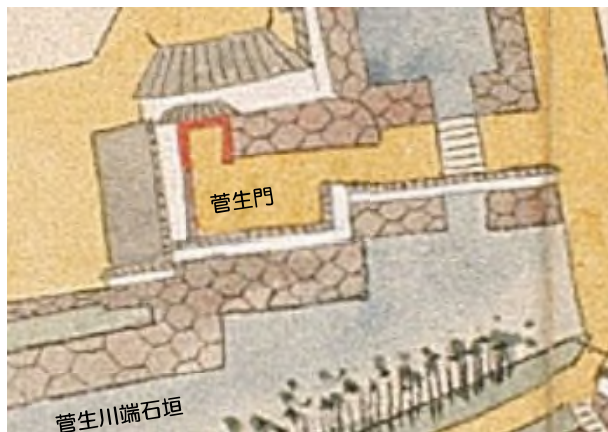


図4 菅生門付近の石垣(水野家時代)



写真7 No. 石垣(隅部の折れ)
一部崩落により裏込め石が流出

【No. 地点】

菅生川端石垣で最も残存状況のよい部分で、現状で高さ 2 mの石垣が露出している。調査ではこれを幅 10m単位で下層部の石垣を確認し、3次元レーザー測量による石垣測量をすることを目的に調査を行っている。

調査ではすでに2か所(20m分)の調査を実施した(現在3・4か所目を調査中)。調査では現況から 2.5m(石垣高さ 4.5m)まで掘削した。

石垣隅部は「算木積み」で積まれている。また石垣は「打込み接ぎ」で積まれるが、東側は矩形の石材を横目地を通して積むのに対し、西側では角が取れた石材で目地が不明瞭である。石垣を積む工人の違いや補修等による積み方の違いが想定されるが詳細は今後の検討課題。



写真11 No. 西側石垣



写真12 No. 東側石垣

【その他】

○石垣上部の法面

現状では法面は堤防道路に向かい傾斜しているが、石垣背後の土層断面の観察からは近世段階では石垣上部は平坦に近かったと想定される。

○石垣埋没部の堆積

石垣が埋没している土層堆積は、上部 1.0mは近代の河川敷造成のための盛土で、それより下層は河川による堆積土であることが分かった。堆積は砂とシルトが互層になっており、菅生川が運ぶ土砂が徐々に堆積していった状況がみられる。

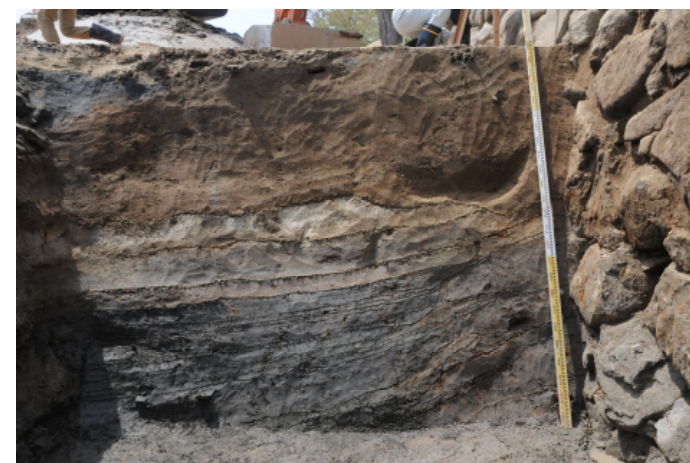


写真13 石垣埋没部の土層堆積状況

〔刻印種類〕

「㊦」

「ㄧ」に「」

「山」

その他

「く」

「□」



写真8 刻印「㊦」



写真9 刻印「ㄧ」に「」



写真10 刻印「山」